

# 看護学生の看護職への志向の特徴

——A 大学入学後 1 年間の変化——

阿 部 朋 子・重 松 豊 美

服 部 容 子・前 川 幸 子

## A Study of Characteristic of Nursing Students' Intention to be a Nursing Professional

——Changes during the first year at A University——

ABE Tomoko, SHIGEMATSU Toyomi, HATTORI Yoko and MAEKAWA Yukiko

**Abstract :** In this study, focusing on achievement motivation that can influence intention, we investigated changes in achievement motivation in relation to the progress of learning during the first year of university to assess the intention of nursing students to be a nursing professional. The study was conducted by anonymous self-administered questionnaires distributed to 112 freshmen students at the Department of Nursing at A University after admission and at 6 and 12 months. For analysis, we first used one-way analysis of variance with repetition of measurements and the Friedman test to determine changes in achievement motivation over time. Then, content analysis was performed to identify the reasons for the changes in achievement motivation. The one-way analysis of variance with repetition of measurements did not reveal a significant difference in the results, and the Friedman test showed significant changes only for 2 items. We thus consider that the achievement motivation of the nursing students remained at a high level throughout the first year. In the content analysis, distinct characteristics were observed 6 months after admission ; the themes derived from the analysis were (1) a vague image formed through experience of the clinical nursing practicum, (2) embodiment of nursing as a profession and discovery of their own problems through experience of the clinical nursing practicum, and (3) conflict between anxiety and a sense of accomplishment about nursing caused by experience of the clinical nursing practicum. It was shown that early experience of the clinical nursing practicum triggered the changes in achievement motivation of the nursing students, because all of these themes included the experience of the clinical nursing practicum. Our study demonstrated that the achievement motivation of the nursing students was wavering because of their own problems and anxiety that were increased with the progress of learning, but still remained at a high level. The intention of nursing students to be a nursing professional seemed to be reinforced by the changes in achievement motivation.

**Key Words :** nursing student, intention to be a nursing professional, achievement motivation

**抄録 :** 本研究では、看護学生の看護職への志向を明らかにするために、志向に影響を及ぼす要因と考えられる達成動機に着目し、入学後 1 年間の学習進度に伴う達成動機の変化に関する調査を行った。研究方法は、A 大学看護学科 1 年生 112 名を対象者とし、入学後、半年後、1 年後の計 3 回にわたり、無記名の自記式アンケート調査を実施した。分析方法は、まず、達成動機の経時的な変化をみるために一元配置分散分析（繰り返しあり）および Friedman 検定を行った。次に、達成動機の変化の理由を明らかにするために内容分析を行った。一元配置分散分析（繰り返しあり）の結果に有意差は

なく、Friedman 検定でも有意な変化がみられたのは2項目のみだった。よって、看護学生の達成動機は1年間を通して高い状態を維持していたと考える。また、内容分析で顕著な特徴が見られたのは入学から半年後であり、そのテーマは〈実習体験による漠然としたイメージ〉、〈実習体験による看護の具体化と自己課題の発見〉、〈実習体験による看護への不安とやりがいのはざま〉の3つであった。これらのテーマにはいずれも実習体験が含まれていることから、看護学生の達成動機は早期体験実習を契機に変化していたことが示された。看護学生の達成動機は、学習の進行に伴う自己課題や不安によって揺れ動きながらも、高い状態を維持していたことが明らかとなった。さらに、看護学生の看護職への志向は、達成動機の変化の影響を受けて高まっていることがわかった。

キーワード：看護学生、看護職への志向、達成動機

## I. はじめに

近年、看護系大学数は増加し、看護系大学に入学してくる学生のすべては、必ずしも看護職になることを志望しているとは限らないことが明らかになっている<sup>1)</sup>。このことから、学生の志望動機は多様化していることが推測される。学生の志望動機は様々であっても、看護職に就くためには、看護職になりたいという目標に向かって常に努力するという看護職への志向が重要である。さらに、常に努力を続けるためには、入学後、学生が看護に価値を見出し、目標を成し遂げようとする意欲を持つことが不可欠である。堀野ら<sup>2)</sup>によると、価値ある仕事に挑戦し、それを成し遂げようとする傾向の強さは達成動機といわれている。この達成動機を看護学生の状況から捉えると、「看護に価値を見出し、看護職になることを成し遂げようとする意欲」と考えられる。よって、本研究では、看護学生の看護職への志向を明らかにするために、志向に影響を及ぼす要因と考えられる達成動機に着目した。これまでに研究者らは、看護学生の達成動機の変化に関する調査を行ってきた<sup>3)</sup>。前回の調査では、看護学生の達成動機は学習進度に伴い変化が生じる可能性がある<sup>4)</sup>と示唆された。

以上のことから、看護学生の達成動機を測定することで看護職への志向を4年間にわたって縦断的に調査することを計画した。達成動機には、自己充實的達成動機と競争的達成動機の2側面がある。看護学生の達成動機に関する先行研究<sup>5)</sup>では、1年次は高校卒業後間もないことから自己の充實を意識しているといわれている。加えて、看護学生には自己を育成したい、自ら努力して最善を尽くしたい、目標に向かって努力したい、という意志が認められたことも報告されてい

る<sup>7)</sup>。これらは、看護学生が他者・社会の評価にはとられず、自分なりの達成基準を目指す自己充實的達成動機に重点を置いていることを示している。そこで、研究者らは、達成動機の中でも自己充實的達成動機を重視しながら看護学生の達成動機を測定し、看護職への志向を把握することとした。

本研究は、4年間の縦断的研究を目的としているが、入学後の1年間は初めて看護の専門的な学習が開始されるため、学生にとっては看護の価値を見出す一つの契機になるといえる。そのため、まずは、入学後1年間の調査を終えた時点で達成動機の変化をみることに意義があると考えた。

したがって、本研究では、入学後1年間の学習進度に伴う看護学生の達成動機の変化を調査し、看護職への志向を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 用語の定義

看護職への志向：「看護職になりたいという目標に向かって常に意識が向かうこと」

看護学生の達成動機：「看護に価値を見出し、それを成し遂げようとする意欲」

### 2. 調査の対象者

A 大学看護学科に在籍する1年生の女子学生 112名。

A 大学看護学科の特徴は、看護師・保健師・助産師・養護教諭（助産師・養護教諭は選択制）の4種類の資格が取得できることである。入学後1年間の授業は、前期には看護の専門科目（看護学概論、基礎看護技術）が開講されており、それらの学習内容をふまえて早期体験実習が前期の終了前に行われる。また、後

期には早期体験実習での体験を生かしながら基礎看護技術の科目が開講され、2年次へと進んでいく。

### 3. 調査期間

第1回目調査は2009年6月22日～6月30日（以下、入学後とする）、第2回目調査は2009年9月24日～10月9日（以下、半年後とする）、第3回目調査は2010年2月9日～2010年2月12日（以下、1年後とする）に実施した。

第1回目調査は入学から2ヶ月後に入学前と看護の学習が開始された入学後の状況を、第2回目は入学から4ヶ月後に実施される早期体験実習と前期の学習終了後の変化を、第3回目は1年次終了時に入学から1年後の変化をそれぞれ把握する目的で調査を実施した。

### 4. 調査内容

入学後（2009年6月）、半年後（2009年9月）、1年後（2010年2月）の計3回にわたり、自記式質問紙調査を実施した。回収は留置法で行った。

質問紙は、Section 1～3の3段階構成とした。Section 1では、対象者の年齢、将来就きたい職業、卒業後の進路について、Section 2は、達成動機測定尺度（堀野ら1991）、Section 3は、1. 達成動機の変化の有無、2. 達成動機の変化の有無の理由に関する自由回答で構成した。

Section 2の達成動機尺度は、堀野ら<sup>3), 4), 8)</sup>によってBendingの尺度を参考に作成され、信頼性・妥当性が検証された尺度である。対象者は質問項目を理解できる年齢以上であれば適用可能<sup>8)</sup>であることから、様々な分野で活用されている。達成動機尺度は、個人として価値を認めるものを成し遂げようとする「自己充実の達成動機」（以下、sfとする）と社会的文化的に価値あることを達成しようとする「競争的達成動機」（以下、cpとする）の2側面で構成されている。sfは「決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい」、「みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい」などの13項目（得点範囲：13～91点）、cpは「競争相手に負けるのはくやしい」、「社会の高い位置を目指すことは重要だと思う」などの10項目（得点範囲：10～70点）があり、7段階リッカート尺度で測定する。

また、Section 3の2. 達成動機の変化の有無の理由は、達成動機が変化した、もしくは変化していない理由を対象者が感じたままに自由記載する形式とした。

### 5. 分析方法

1) 対象者の属性および将来就きたい職業、卒業後の進路は単純集計を行った。

2) 達成動機は、sfおよびcpの合計点の平均値を算出し、調査時期による差異を一元配置分散分析（繰返しあり）で比較した。また、sfの各項目は、調査時期による分布の変化をFriedman検定で比較した。統計的分析にはSPSS Statistics 18を使用し、有意水準は $p < 0.05$ とした。

3) 達成動機の変化の理由は、①1年次の看護学生はsfを重視する傾向があるという先行研究<sup>6), 7)</sup>の結果から、対象者のsf合計点に着目した。②対象者の入学後と1年後のsf合計点を比較し、1年後にsf合計点が1点でも上昇した場合には上昇群に、入学後と1年後のsf合計点が同一点だった場合は変化なし群に、1年後にsf合計点が1点でも下降した場合には下降群に分類した。③その後、各群の入学後および1年後の達成動機の変化の理由に関する自由記述内容の内容分析を行った。④内容分析は、対象者の自由記述の文脈を崩さない形で項目として表記し、項目の意味内容のまとまりからテーマを抽出した。分析過程においては、研究者間で繰返し検討を行い、質的研究経験者のスーパーバイズを受けて分析の妥当性を確保した。

4) 上記の内容分析の後に1年間の達成動機の経過をみていくと、1年間の間に変化をもたらす要因が存在していることがわかった。そこで、半年後の自由記述の内容分析を追加して行った。内容分析は、3) ④の方法と同様に行った。

### 6. 倫理的配慮

研究者の所属する大学の研究倫理委員会による承認後、対象者に説明を行った。説明は成績評価とは関係のない研究メンバーが授業時間外に行った。その際、研究目的と内容、調査協力への参加と中止は自由であること、協力の有無や調査結果によって不利益を被らないこと、成績評価とは一切関係ないこと、匿名性の保持などを口頭と文書で説明した。全てのアンケート調査の実施前には必ず上記の手続きで説明を実施し、対象者の了承はアンケートの回答をもって得られたものと判断した。

アンケートは個人の変化を追跡できるように作成したが、無記名のため対象者自身が作成したパスワードで識別できるようにした。なお、パスワードは対象者自身が管理し、研究者らが個人を特定することは一切できないようにした。

### Ⅲ. 結 果

対象者 112 名中、3 回の調査全てに回答したのは 60 名（回収率 53.6%）で、そのうち有効回答は 58 名（有効回答率 96.7%）だった。

#### 1. 対象者の背景

##### 1) 対象者の属性

対象者の平均年齢は  $18.2 \pm 0.4$  歳、性別は全員女性だった。

##### 2) 将来就きたい職業

入学後、半年後は看護師のみを選択した割合は過半数を超えていたが、1 年後は複数の職業を選択した割合が約半数に増加していた（表 1）。

##### 3) 卒業後の進路

全ての調査時期において「看護職として働きたい」が約 9 割を占めていた（表 2）。

その他の回答内容としては、入学後は「大学院への進学」、「病院で数年働いた後に老人介護施設で看護師もしくはケアマネージャーとして働きたい」、半年後は「助産師として働きたい気はするが、先生方のような教諭にもなりたい」、「介護の世界で働きたい」、1 年後は「何年か病院で勤めした後、介護関係に就きたい」だった。

#### 2. 達成動機の全体傾向

sf の合計点（得点範囲：13～91 点）の平均値は入学後  $73.9 \pm 7.0$  点、半年後  $73.5 \pm 6.9$  点、1 年後  $74.3 \pm 7.6$  点で、cp の合計点（得点範囲：10～70 点）の平

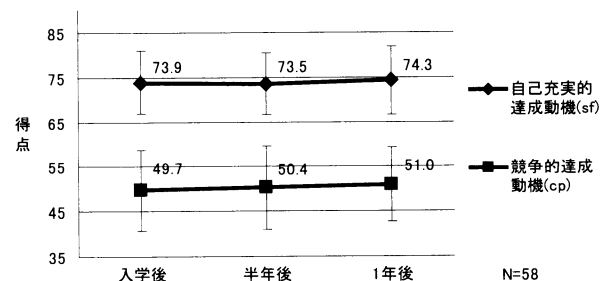
均値は入学後  $49.7 \pm 9.3$  点、半年後  $50.4 \pm 9.5$  点、1 年後  $51.0 \pm 8.6$  点だった（図 1）。

sf および cp 合計点の平均値の各調査時期における差異を一元配置分散分析（繰返しあり）で検定した結果、有意差はなかった。

また、sf の各項目の分布の変化を Friedman 検定で分析した結果、13 項目のうち 2 項目が有意に変化した（ $p < 0.05$ ）、その他の 11 項目に有意差はみられなかった。有意差がみられた項目は、「ちょっとした工夫をすることが好きだ」、「いろいろなことを学んで自分を深めたい」の 2 項目だった。

「ちょっとした工夫をすることが好きだ」は、「非常によく当てはまる」「ほとんど当てはまる」「少し当てはまる」の全体に占める人数と割合が入学後は 40 名（69.0%）、半年後は 43 名（74.1%）、1 年後は 45 名（77.6%）で、有意に増加していた（図 2）。

「いろいろなことを学んで自分を深めたい」は、「非常によく当てはまる」「ほとんど当てはまる」「少し当てはまる」の全体に占める人数と割合が入学後は 54 名（93.1%）、半年後は 52 名（89.7%）、1 年後は 50



注：一元配置分散分析（繰返しあり）の結果、sf, cp とともに全ての調査時期で有意差なし

図 1 達成動機の合計点の平均値の変化

表 1 将来就きたい職業

N = 58

	看護師		保健師		助産師		養護教諭		複数希望		回答なし	
	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)
入学後	35	(60.3)	2	(3.4)	6	(10.3)	7	(12.1)	8	(13.8)	0	(0)
半年後	30	(51.7)	0	(0)	4	(6.9)	3	(5.2)	21	(36.2)	0	(0)
1 年後	23	(39.7)	0	(0)	3	(5.2)	5	(8.6)	26	(44.8)	1	(1.7)

表 2 卒業後の進路

N = 58

	看護職として働きたい		看護職として働くかどうか迷っている		看護職として働く予定はない		その他		複数希望		回答なし	
	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)	人数(名)	割合(%)
入学後	52	(89.7)	1	(1.7)	0	(0)	2	(3.4)	2	(3.4)	1	(1.7)
半年後	52	(89.7)	4	(6.9)	0	(0)	2	(3.4)	0	(0)	0	(0)
1 年後	54	(93.1)	2	(3.4)	0	(0)	1	(1.7)	0	(0)	1	(1.7)

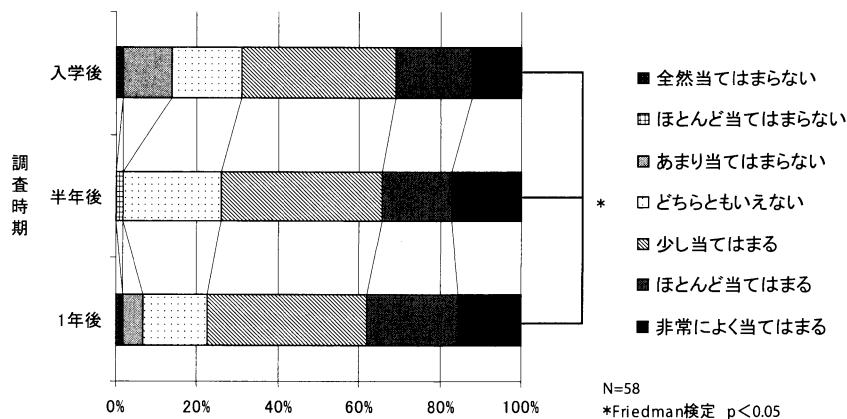


図2 sf 6: ちょっとした工夫をすることが好きだ

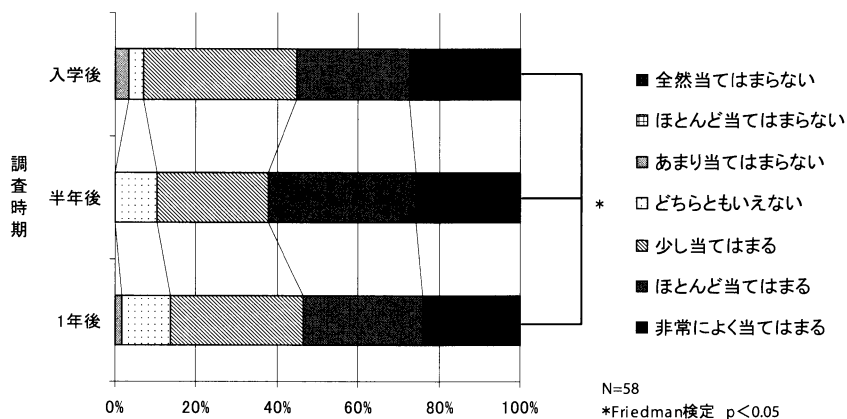


図3 sf 16: いろいろなことを学んで自分を深めたい

名 (86.2%) で、有意に減少していた (図3)。

### 3. 入学後1年間の達成動機の変化

sf の合計点を比較した基準をもとに分類した結果、上昇群は30名 (51.7%)、変化なし群は5名 (8.6%)、下降群は23名 (39.7%) だった。以下、各群のテーマを〈 〉で、項目例を「 」で示し、各群の結果を記述する (表3)。

上昇群では、入学後 (48項目) は「看護を学び、看護職に対する興味が深まった」が、「看護の授業が具体的にすることで、プレッシャーや不安を今まで以上に感じる」、「学年が進むにつれて学業が忙しくなるため、看護師になれるのか不安だ」などの項目から〈看護を学ぶことへの関心の深まりと不安の出現〉が抽出された。1年後 (45項目) は「実習や授業を通して、リアルな看護師像が捉えられるようになった」、「授業で学んだ看護技術を実践の場で活かしたい」が、「看護技術を練習するのは大変だ」などの項目がみられ、〈ケアの主体者としての準備状態の高まり〉へと変化していた。

変化なし群では、入学後 (8項目) は「専門科目の

勉強は刺激があって楽しい」、「看護の学習から看護職のやりがいを感じた」に加え、「専門科目の学習は難しいが、やめたいとは思わない」などの項目から〈看護の学習の楽しさと看護職を志向することへの肯定感〉が抽出された。1年後 (6項目) は「看護師や保健師の資格を取ることで、将来の選択枝を増やしたい」が、「学年が進むにつれて看護を学ぶ大変さを実感し、不安だ」などの項目から〈資格志向の高まりと学習課題に対する不安の増大〉へと変化していた。

下降群では、入学後 (36項目) は「看護の学習をする程、看護師の大変さを実感するが頑張りたい」が、「看護の授業は難しく、看護職になれるか不安だ」、「看護の仕事の大変さや責任をより感じるようになった」などの項目から〈看護職を志向する気持ちの中で直面する看護の現実〉が抽出された。1年後 (37項目) は「実習を通して看護職になりたい思いは強くなった」、しかし、「実際の医療の現場をみて、大変そうだと感じた」、「1年間の学習を終えて、看護職になれるか不安だ」などの項目から〈看護職への志向の高まりと不安の拮抗〉がテーマとして抽出された。

さらに、共通点としては、入学後および1年後の項

表3 各群別にみる入学後1年間の達成動機の変化

群	入学後		1年後	
	テーマ	項目例	テーマ	項目例
上昇群	〈看護を学ぶことへの関心の深まりと不安の出現〉	「授業で看護技術を学び、看護師になって患者の援助をすることに実感が湧いた」 「先生の話の聞いたり、新聞やテレビの医療に関する話題に触れる機会が多くなったことで、考え方が変化してきた」 「看護を学び、看護職に対する興味が深まった」 「看護の授業が具体的にすることで、プレッシャーや不安を今まで以上に感じる」 「看護職は思っていた以上に大変だ」 「学年が進むにつれて学業が忙しくなるため、看護師になれるのか不安だ」	〈ケアの主体者としての準備状態の高まり〉	「実習や授業を通して、リアルな看護師像が捉えられるようになった」 「実習や授業の影響で看護職になりたいと思うようになった」 「実習で看護師の仕事をみることで、看護師への魅力を実感した」 「患者に援助を行ってみたい」 「授業で学んだ看護技術を実践の場で活かしたい」 「授業で今まで知らなかった看護がわかると、もっと学びたい」 「看護職になって人の助けになりたいという気持ちは変わらない」 「人とかかわる看護職は正解がないので、悩むことが多い」 「看護技術を練習するのは大変だ」
変化なし群	〈看護の学習の楽しさと看護職を志向することへの肯定感〉	「専門科目の勉強は刺激があって楽しい」 「看護の授業が楽しい」 「看護の学習から看護職のやりがいを感じた」 「専門科目の学習は難しいが、やめたいとは思わない」	〈資格志向の高まりと学習課題に対する不安〉	「介護・福祉関係で働きたい」 「看護師や保健師の資格を取ることで、将来の選択肢を増やしたい」 「大学の勉強は大変だ」 「学年が進むにつれて看護を学ぶ大変さを実感し、不安だ」 「看護師になりたい気持ちは変わらない」
下降群	〈看護職を志向する気持ちの中で直面する看護の現実〉	「今後の実習や授業で看護師の見方や看護への取り組みは変化していくかもしれない」 「看護の学習をする程、看護師の大変さを実感するが頑張りたい」 「先生の看護の体験談や教材で看護を学習していくうちに、看護職になりたい思いは強まった」 「看護職になって社会貢献がしたい」 「看護師の志望動機を思い出し、看護の学習が大変でも頑張りたい」 「看護の仕事の大変さや責任をより感じるようになった」 「看護の授業は難しく、看護職になれるか不安だ」	〈看護職への志向の高まりと不安の拮抗〉	「実習を通して看護職になりたい思いは強くなった」 「実習や学内演習で看護への興味が増した」 「実習後と同じように看護職になりたい思いは変わらない」 「実際の医療の現場をみて、大変そうだと感じた」 「看護の専門知識が増えるのは大変だが、看護を学ぶことは楽しい」 「看護師になるという夢を叶えられたら幸せだ」 「看護職になることで人の役に立てるし、やりがいもあるので、看護師への志望が強くなった」 「1年間の学習を終えて、看護職になれるか不安だ」 「看護職になりたいが、今後の学習が心配だ」

表4 入学後1年間の達成動機に変化をもたらす要因 (入学半年後の自由記述の内容分析)

テーマ	項目例
〈実習体験による看護職への漠然としたイメージ〉	「実習に行き様々な考え方の変化があった」 「実習に行って患者と触れ合うことで、人と接する職業はいいと思うようになった」 「実際の現場をみて、より強く看護職になりたいと思うようになった」 「実習を通してもっと看護に興味を持てた」 「実習に行き、現場を実際に体験してより強く看護職になりたいと感じた」
〈実習体験による看護の具体化と自己課題の発見〉	「実習に行って、看護師の仕事を現実的にみることができるようになった」 「実習に行って、看護師と患者とふれあい、看護師のやりがいを強く感じ、やりたい気持ちが強くなった」 「病院実習に行って、自分がこれから何をすべきかが以前よりも明確になった」 「看護師に対する憧れが大きかった」
〈実習体験による看護への不安とやりがいのほぎま〉	「実習で実際に看護師と患者のコミュニケーションのあり方を見て学ぶことで、以前よりも強く看護師になりたいと思った」 「実習に行って、患者の看護ができるようになりたいと感じた」 「実習での患者との出会いでもっと深く関わりたいと思った」 「実習を通し、患者や看護師とかかわって、看護師の仕事によりやりがいを感じた」 「実習で看護職の大変さを感じたので、将来なれるかどうか不安だ」 「本当に看護ができるのか不安だ」

目として「実習や授業の影響で看護職になりたいと思うようになった」、「実習で看護師の仕事をする事で、看護師への魅力を実感した」、さらに、「実習後と同じように看護職になりたい思いは変わらない」などがあり、入学から4ヵ月後の早期体験実習に関する内容が多くみられた。

#### 4. 入学後から1年後の達成動機に変化をもたらす要因

入学後から1年後の達成動機に変化をもたらす要因を明らかにするために半年後の自由記述の内容分析を行った。全体の項目数は57項目で、3テーマが抽出された(表4)。

「実習に行って患者と触れ合うことで、人と接する職業はいいと思うようになった」、「実際の現場をみて、より強く看護職になりたいと思うようになった」などの項目から〈実習体験による漠然としたイメージ〉が、「実習に行って、看護師の仕事を実感的にみることができるようになった」、「病院実習に行って、自分がこれから何をすべきかが以前よりも明確になった」などの項目から〈実習体験による看護の具体化と自己課題の発見〉が、「実習を通し、患者や看護師とかわって、看護師の仕事によりやりがいを感じた」が、「実習で看護職の大変さを感じたので、将来なれるかどうか不安だ」などの項目から〈実習体験による看護への不安とやりがいはごま〉がテーマとして抽出された。

### IV. 考 察

#### 1. 看護学生の看護職への志向に影響を及ぼした達成動機の特徴

達成動機の合計点の平均値に着目すると、入学後からの1年間における計3回の調査のsf合計点(91点満点)の平均値は74点前後、cp合計点(70点満点)の平均値は50点前後で推移しており、A大学看護学生の達成動機の合計点の平均値は高い傾向にあるといえる。また、この結果は先行研究<sup>9), 10)</sup>(sf合計点の平均値：一般女子大学生70.4点、看護学生74.3点、cp合計点の平均値：一般女子大学生43.7点、看護学生42.6点)と比較しても高い値を示しており、A大学看護学生の達成動機は他の調査結果よりも高い状態にあった。さらに、達成動機の合計点の平均値は一元配置分散分析(繰返しあり)の結果、有意差は認められなかったため、入学後1年間では達成動機は変化しな

いことが明らかとなった。以上のことから、A大学看護学生の達成動機は入学後の1年間にわたり高値で維持されていたといえる。

次に、達成動機の詳細をみると、sf項目の「ちょっとした工夫をすることが好きだ」で当てはまる人の割合が有意に増加していた。看護学生は、学習内容の多さと密度の濃さに加え、馴染みのない専門用語を覚えたり、自分で思考する学習を求められたりするために、高校までの学習方法では太刀打ちできない状況に直面するといわれている<sup>11)</sup>。このことから、学生は大学での学習に適応するために学習方法を工夫していることが推測される。さらに、学生は1年生の前期から基礎看護技術を学び、日常生活行動の援助に関する学習を行っていることから、日常的に工夫して生活することへの関心が高まっていると考える。また、sf項目の「いろいろなことを学んで自分を深めたい」は、当てはまる人の割合が有意に減少していた。これには、学習の進行に伴う専門科目の増加や、学習内容や課題の複雑化が影響を与えていた。実際に、学生は自由記述の中で「学年が進むにつれて看護の学習が難しくなるため、今の学習方法に不安を感じる」、「看護技術の練習は大変だ」などの回答をしている。学生は余裕を持って色々なことを学ぶというよりも、自分の目標とする看護職に少しでも近づくために看護の学習や課題に専念していると推察される。以上、sfの2項目の変化は、看護学生の達成動機が入学後の学習内容に影響を受けて微細に変化することを示している。

さらに、達成動機の変化の特徴を内容分析によりみたところ、入学から1年後にsfが上昇した上昇群は入学後の〈看護を学ぶことへの関心の深まりと不安の出現〉している状況から〈ケアの主体者としての準備状態の高まり〉に変化していた。これは、徐々に看護への志向が高まった結果、看護にかかわる主体的な存在としての価値を見出しているという特徴を示している。sfに変化がなかった変化なし群は〈看護の学習の楽しさと看護職を志向することへの肯定感〉があった状態から〈資格志向の高まりと学習課題に対する不安〉がみられる状態へと変化していた。学生は学習進度に伴って実習などの具体的な学習から看護を実践的に捉えるようになるとともに、資格を得ることへの価値や学習課題への不安が生じる特徴を持つといえる。sfが下降した下降群は〈看護職を志向する気持ちの中で直面する看護の現実〉から〈看護職への志向の高まりと不安の拮抗〉へと変化していた。学生の看護職に就きたいという目標は持続し、看護職への志向は高

まる傾向にあるが、看護職の現実や実際を知ることで不安が生じるという特徴が示された。また、この不安の出現は看護学生の達成動機が下降する原因となっていた。以上のことから、3群全てにおいて看護職への志向は高まる傾向にあるものの、看護学生の達成動機は学習進度に伴って異なる変化が生じていたことがわかった。

したがって、入学後1年間における看護学生の達成動機は、看護の学習に伴う自己課題や不安によって揺れ動きながらも高い状態を維持し、その影響を受けて看護学生の看護職への志向は高まっていたといえる。

## 2. 入学後1年間の看護職への志向に変化を及ぼした看護学実習

入学後と1年後の達成動機には統計的に有意差はなかったものの、内容分析から達成動機は揺れ動いていることが認められた。また、入学後と1年後の間には達成動機に変化をもたらす要因があることが予測された。そこで、変化の節目があると考えられた入学から半年後の内容分析を行った結果、〈実習体験による漠然としたイメージ〉、〈実習体験による看護の具体化と自己課題の発見〉、〈実習体験による看護への不安とやりがいのほざま〉の3テーマが抽出された。いずれのテーマにも体験実習が含まれており、看護学実習は看護学生の達成動機に大きな影響を与えていることを示している。学生は実習で初めて看護の実際に触れ、看護の具体的な内容を目の当たりにする。その体験は、学生により看護を現実的に学ぶことや看護を具体的に捉えることの必要性を実感させていた。したがって、実習体験をもとに学生が新たな看護の価値や魅力、やりがいを見出したことがきっかけとなり、看護学生の達成動機は変化したといえる。この実習でのリアルな体験は、実習終了後から半年を経ても学生の中に強く残り、入学から1年後の看護職への志向にも影響を及ぼし続けていることがわかった。

以上のことから、入学から4ヶ月後の早期体験実習は看護学生の志向に変化をもたらす契機になったといえる。

## V. おわりに

看護学生の達成動機は、学習の進行に伴う自己課題や不安によって揺れ動きながらも高い状態を維持していた。その達成動機の変化の契機となっていたのは、早期体験実習だったことがわかった。その実習での体

験や日々の学習に基づく不安や自己課題は出現するが、看護学生の看護職への志向は高まっていたことも明らかとなった。

本研究は縦断的調査の第1段階にあたるものであり、研究デザインにおいては通過点に過ぎない。しかし、看護学生の入学後1年間の看護職への志向の特徴とその変化の契機となる要因が明らかとなったことは、教育の対象者である学生を理解する上で重要な資料になる。今後は、研究を継続し、看護学生の看護職への志向に対する理解を深める必要がある。

さらに、縦断的な調査の結果をもとに看護学生の看護職への志向を把握しながら、随時、研究の成果を教育的なかかわりとして直接学生に還元していくことも課題である。

## 文 献

- 1) 竹本由香里：看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討。宮城大学看護学部紀要 2008；11(1)：13-20
- 2) 倉沢寿之：動機づけ・欲求。堀洋道、山本真理子、松井豊編：心理尺度ファイルー人間と社会を測るー。垣内出版株式会社、東京、1994、p 172
- 3) 堀野緑、森和代：抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因。教育心理学研究 1991；39(3)：66-73
- 4) 堀野緑：達成動機の心理学的考察。風間書房、東京、1994、pp 23-24
- 5) 重松豊美、服部容子、阿部朋子他：看護学生の達成動機の変化ー入学時と基礎看護学の学習終了時の比較。第29回日本看護科学学会学術集会 講演集 2009；292
- 6) 森田敏子、松永保子、浅本薫他：看護大学生の達成動機に関する研究ー因子構造とその因子を規定する要因の検討ー。福井医科大学研究雑誌 2000；1(3)：447-467
- 7) 森田敏子、松永保子、波多野文子：今、看護に必要な力ー自己教育力ー5 達成動機と自己教育力。Quality Nursing 2004；10(3)：278-282
- 8) 倉沢寿之：動機づけ・欲求。吉田富二雄編：心理測定尺度集Ⅱー人と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉ー。サイエンス社、東京、2005、pp 63-64
- 9) 鈴木幹子、清水洋子、伊藤裕子：女子青年における達成動機と育児性との関連ー女性性受容を媒介としてー。思春期学 2008；26(3)：315-321
- 10) 森田祐代、倉田トシ子、渡邊裕子：達成動機別に見た学生相互評価における達成感への影響の検討ー老年看護学看護過程演習においてー。日本看護学会論文集 看護教育 2003；34：124-126
- 11) 田代マツコ：看護学生の自己教育力ー1年次の自己教育力とその変化ー。大阪医科大学附属専門学校紀要 2006；12：1-8